

# 新会長に聞く

6月の総会で新会長に選任された。現在は大学で教鞭を執るが、かつてはゼネコンの設備設計部門に18年間身を置き、実務経験の方が長い。「スタープレイヤー」にスポットが当てられがちだが、影で支える側の気持ちを忘れずに運営していきたい」と語る。建築物に対する省エネルギー需要は高まり、14年には建築士法が改正され建築設備士が法律に位置づけられた。建築設備に対する社会的要請が高まる中、協会としての役割は何か。野部新会長に聞いた。

## 機械化の中でも人の仕事残す

野部会長の就任と時を同じくして、協会では「ABME VISION 2030」という中期計画を策定。「人間の健康と安全及び自然・地球環境の保全を担う技術者として、その使命と職責を自覚し、品位の向上と技術の研さんに努め、誠意を持って職務を遂行することを促す」との理念を掲げた。「この理念をどう実現するかが今一番の関心事。実現のための環境を作っていく」と意気込む。

「設備の比重が大きくなってきているのは明らか。

### 野部 達夫 氏 の 建築設備技術者協会



【略歴】81年3月早稲田大学理工学部建築学科卒業、83年3月同大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了、同年4月清水建設入社(01年3月退職)、89年3月早稲田大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程修了、98年4月早稲田大学理工学部非常勤講師(03年3月退職)、01年4月工学院大学工学部建築学科助教、04年4月同教授(11年4月に改組により建築学科建築学科教授)、14年5月建築設備技術者協会副会長、16年6月同会長。東京都出身、58歳。

産業構造は勃興期から成熟期に入っている。勃興期のビジネスモデルである効率化・高速化を踏襲するのではなく、人がすべきことを峻別し残していく必要がある」として、技術者の職能発揮に向け、成熟期に入っている。勃興期のビジネスモデルである効率化・高速化を踏襲するのではなく、人がすべきことを峻別し残していく必要がある」として、技術者の職能発揮に向け、

「設備は建物の内臓。みを作りたい」と展望を示した。そうした中では、将来を担う若手技術者の育成も急務となる。「設備技術者はルーティンワークではない。応用問題も解ける人材が育つ仕組みだ。

## 応用力のある人材育成を

美を感じる。設備に美が宿る瞬間を集めた写真集も発行してみたい」とのアイデアも覗かせた。